

# 国際連合大学の回顧と期待

木田 宏

国連大学の発足を回想するに当たりましては、忘れることのできない方々のお名前が浮かんで参ります。

私が初めて「国連大学」、「国際大学」の名前を耳にしましたのは、国連で国連大学が議せられるようになるよりもずっと以前のことでした。ちょうど、1964年、私が日本ユネスコ国内委員会事務局次長の職にありましたとき、何の前触れもなくアメリカの老婦人が役所に訪ねてこられ、来るべきユネスコ総会において、国際機関としての大学を日本に設置するよう、日本から要請しろという提案をされました。

彼女は言います。「日本は、西洋の文化と東洋の文化の接点にある。東西文化の上に立って次の世界市民を育成するのに、日本は最適の地の利をもっている。日本が積極的に国連機関としての大学を作るよう、まずユネスコの総会で発議しなさい。必ず賛成が得られるように各国にも働きかけますから」。

私は全く驚いてしまいました。彼女の理由はよく分かりますが、日本は、自分のしたいことを自ら言うといった習慣を持っていません。ユネスコ総会に出席する日本の政府代表に、にわかになんか提案をしてもうことは不可能で、彼女の発想を突りあるものにするためには、国内で構想を十分検討し、論議を高めていく必要がある、と答えました。

彼女の名前はエリザベス・ローズ夫人、コロラド州デンバーの出身と聞きました。彼女は、愛知揆一文相、元文相の森戸辰男、中山伊知郎、松本重治、前田義徳等々の諸氏を歴訪して、熱心に国連大学誘致の必要を説いて回りました。また私財を投じ、松本重治氏の協力を得て国際文化会館を会合の場としながら、有志の方々による検討委員会の討議を促しました。

彼女の提案は当初、4年制の大学で、教授や学生を各国から募集するという態のものでした。2,3年検討を行った結果、4年制の大学を設けることは難点が多く、研究者の研究活動を中心とした大学、世界の大学や研究機関と研究システムを組める大学を設置すれば、意義のあるものとなるであろうとローズ夫人に答えました。

この間に夫人は、ユネスコの第三代事務局長エバンズ博士その他をつれて来日し、わが国の要人に会わせたり、自ら国連、豪州、インド等を歴訪して、日本に新しい国際大学を設けることに賛同を得ようとしていました。

国連がウ・タント事務総長の下で、国連大学を設置することについて検討を開始した経緯は、私にはよく分かりません。しかし、ローズ夫人の活動が全く無関係であったとは思われません。

国連自ら検討を開始するようになって、前田陽一、永井道雄氏等の有識者もその検討に参加されることになりましたが、先の検討委員会での討議があったことは、わが国関係者の取り組みに力強い支えを与えたものと考えています。日本政府は今度は、国連大学の創設に協力し、その本部を招致する用意のあることを表明しましたが、それは当時の首相で、後にわが国で初めてノーベル平和賞を受賞した佐藤栄作氏の決断によるものでありました。また元外相の木村官房長官も総理を助けて、招致に尽力されました。

1973年12月、第28回国連総会において、国連大学憲章が採択されました。国連大学が研究・研修センター及び研究・研修計画の世界的組織として、その本部を東京に設けることも、その憲章で明らかにされました。

1974年に初代のヘスター学長、ゴードリー理事会議長、ナラシマン国連事務次長の三氏が羽田に到着したとき、私は国連大学受け入れ担当の責任者（文部省学術国際局長）として出迎え、それ以後、仮事務所の設置、東邦生命ビルでの本部の開設、恒久的所在地の選択などの協力を続けました。ヘスター学長とともに候補地を見て回ったことも、印象深い思い出であります。ヘスター学長は都内の中心地に本部を置くよう強く希望されましたが、地価が大変高いので、それは日本政府にとって大変困難な課題でした。しかしその土地も、鈴木東京都知事のご理解によって、この本部に近い都内の一等地に広い土地を利用できるようになりま

した。関係者のご理解の賜物であると考えます。

国連大学は独立した国際組織であります。また大学自治を享有する機関であります。それゆえ、日本側としてどのように国連大学の活動に協力するかについては、難しい微妙なものがあります。

大学自治を享有する国連大学と国連やユネスコの事務処理の間にも、問題があるように見受けました。私は文部省で大学学術局長もしておりましたので、設置者である政府側と大学側の発想に齟齬が生じることはよく理解できます。大学の世話をする事務当局は、学界の人々の自由な発想を、政府の規定に従いながら上手に実現するという術を持たなければなりません。

国連大学は発足早々の赤子のときから、一人前の国連機関の一員として、国連組織の規定と運用をマスターしていることを求められているようでした。私もまずは募金の手助けをしたいと考え、アメリカの駐日大使を訪ねて、国連大学に対する拠出を求めたいとお願いしました。しかし残念なことに、大統領の同意を得ても、議会の同意を得ることができませんでした。努力をされたヘスター学長にとっても、これは残念なことであったと考えます。アメリカの協力が得られなかったことは、募金についての誤算でありました。

個人的な意見ですが、国連大学を日本へ招致すれば、日本の学者たちを広く他国の人々と接触させることができると考えました。国連大学が東京で活発な活動を展開するようになれば、日本の学界に関係のある活動も期待できると思いました。国連大学が日本の学界ともっと緊密な関係をもつようになれば、日本の学界の国際的活動も活発になり、日本政府の援助も大きくなるのではないのでしょうか。国連大学を日本に誘致した意義は、同大学を通じて日本の学者や研究者がもっと広く世界の人々と結び付くようになる、即ちわが国の学者を先進諸国だけでなく途上国も含めた世界の研究者につなぐことができることにあると思うのです。

しかし、この点は率直に言って、これからの国連大学に期待するところでもあります。ヘスター学長もスジャトモコ学長も、資金の不十分な中で、国連大学を赤ん坊から少年にまで育てるのに精一杯の努力をされたと思います。そのことについて、加藤一郎、大来佐武郎、永井道雄の各氏は、日本からの関係者として、いろいろの尽力をしてこられました。

ですから、私は国連大学の今後に期待をしたい。もう10年、20年の後に国連大学の活動が充実して成人の域に達し、真に国際的な大学に発展することを切望したいのであります。